

平和という名の「日常」

(原文)

柳沢 凜 (16 歳)

愛知県

愛知県立千種高等学校

「私たちはただ今まで通りの生活がしたい。慣れ親しんだ故郷で、大切な人たちに囲まれたいつもの日常を取り戻したい。」

ロシアからの侵攻が続くウクライナから逃れ、日本でたったひとり避難生活を続ける、私と同じ年齢ほどの女性の言葉が胸を打つ。ニュース番組が終わり、テレビのリモコンボタンを一度押すだけで、行列のできるお店に並び、できたての料理を家族みんなでおいしそうに頬張っている日本の映像へと切り替わった。そして、私の心もいつもの「日常」へと戻っていった。

インターネットや SNS の普及により、世界の国々の情報をリアルタイムに入手することができ、遠方の国々の人々とも直接やりとりすることが可能になった。コロナ禍においても、オンラインで世界旅行を疑似体験するツアーが人気となり、定着した。簡単で手軽な方法で世界を身近に感じられるようになったことで、多くの国々の人々の交流が生まれていったのである。

しかし、身近で簡単に情報が手に入る一方で、フェイクニュースやプロパガンダに誘導され、一片の偏った情報ですべてを知り得たような思い込みが起きている。個々の人々の「日常」の、限られた時間の中だけで得られた情報を全てとして捉え、その後の「日常」へ戻ってしまうからである。そしてその情報は、「日常」の片隅にしまわれてしまう。私が聞いたウクライナの女性の言葉も、しばらく「日常」の片隅にしまわれてしまった。

昨年の夏、私には国境を越えたたくさんの仲間ができた。中学生の頃、コロナ禍で叶わなかった留学のチャンスをつかんだからだ。海外の人と関わる機会が乏しかった私は、研修で留学生の仲間と交流し、価値観や考え方の違いに触れる度に、これまで自分が考えていた「平和」の捉え方が変わってきていると感じている。それぞれの留学生が自国の文化や言語に誇りを持ち、故郷や家族の尊い話を楽しそうに話す。そして、日本人や文化に敬意をもって接している。そういった姿勢の輪の中に自分がいることで、自分の生まれた日本や、相手の国の言語や文化についてもっと深く知りたいと感じるようになった。文化を調べる内に、その文化は歴史から生まれ、思想にまで及んでいることに気付く、テレビやインターネットで見た「日常」にしまわれていた世界の国のことを、リアルな自分の「日常」に置き換えられるようになったのだ。

これまでの私は「平和」=戦争のないことと思っていた。しかし、たとえ戦争が終わっても、愛する

人や慣れ親しんだ故郷の風景、誇りを持った文化や言語が奪われた「日常」は、「平和」とは呼ぶことができないと考えるようになった。

戦争だけではない。世界中の異常気象の中で発生している自然災害や、大地震、パンデミックも世界中の人々から「日常」を奪い、心の「平和」のバランスを崩してしまう。

「平和な未来」を考えた時、これからの私たちにできること。それは、世界の様々な環境に住む、それぞれ違う言語や文化・価値観をもった人々が、交流を継続していくことだと考える。継続した交流が、相互理解と尊重する気持ちにつながっていくのではないか。SNS やインターネットを利用してより幅広い年代が継続してつながっていくことで、直接交流へと進んでいくことができれば、よりリアルなお互いの「日常」を自分のこととして考えることができるようになる。そして、世界の国へ目を向けることが、自分の国を理解することにもつながっていく。

考え方の摩擦や誤解は、それに関わる全ての人々の「日常」を変えてしまう。敬意をもって相手を理解し、自分にも自信と誇りを持つこと。私の挑戦はこれから始まる。自分の愛する「日常」を紹介し、相手の「日常」を知ること。尊い「平和」のため、自分の目と耳で、リアルな「日常」を体験してこよう。